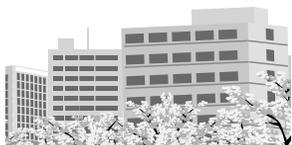


会員の広場



2026(令和8)年、午年にこいて

田川 修二(東京)

2026年は「午年」、そして60年に一度巡ってくる「丙午」です。

午は十二支の7番目で動物の馬が当てはめられています。午の刻は昼の12時を中心とする2時間。12時が正午で、前を午前、後を午後とする由来でもあります。方位は南。子午線の語はこれに寄ります。「何事も馬くいく」

と、古来より人々の暮らしを支え神様の使いとしても崇められてきた、縁起のよい干支とされています。

午年は、馬のように一直線に駆け抜けるイメージから、「陽気」「情熱」「前進」「飛躍」といったエネルギーに満ちて新しい挑戦や冒険に適した年とされています。馬は約6000年前に家畜化が始まり、人類の文化と発展に不可欠な存在でした。今も乗馬や競馬など日常文化の中に生き続けています。日本では古墳時代に朝鮮半島経由で伝来し農耕などに活用され、武士の時代には馬術が発達しました。このように馬と人との付き合いは長く、昔から親しまれてきたので、馬にまつわる言葉やことわざは多くあります。

馬力(75kgの重量の物体を1秒間に1m動かす力が1馬力、人間の平均的な馬力は0.1馬力)、馬魚(タツノオトシゴ)、馬頭観音

菩薩、馬軍、騎兵隊、厩所皇子(聖徳太子の名)、馬酔木、兵馬俑、ベガサス、クサントス、若駒、仔馬、馬を鹿、親馬鹿子馬鹿、火事場の馬鹿力、春の馬、孕馬、春駒。「千里馬」、「馬の耳に念仏」、「尻馬に乗る」、「馬子にも衣装」、「馬が合う」、「生き馬の目を抜く」、「赤馬が飛ぶ」、「追うは桂馬に逃げるは一間」、「天高く来馬肥ゆる秋」、「子馬の朝駆け」、「馬耳東風」、「下馬評」、「倚馬の才」。

次に人間訓にある「人間万事塞翁が馬」の由来となったエピソードを紹介します。

「中国の北境の塞の近くに住む老人(塞翁)の馬が逃げた。近所の人々は同情しましたが、老人は『悲しむことはない。このことが幸せになるかもしれない』と言った。数カ月後、逃げた馬が立派な馬を連れて帰ってきました。近所の人々は祝福しましたが、老人は『この

ことが禍になるかもしれない』と言った。老人の家には良い馬が増えたが、乗馬の好きな老人の息子が落馬して足を骨折した。近所の人々が老人を慰めると老人は『このことが幸いになるかもしれない』と言った。1年後、敵の大軍が攻め入ってきました。多くの若者が戦争に駆り出されて戦死しましたが、老人の息子は足が悪かったために召集されず、戦死しなくて済んだ」

この故事には、人生を前向きに生きるヒントが詰まっていると思います。馬は古来より速さ・力・忠誠心などの象徴に使われてきました。ことわざには鋭い風刺や教訓、知識などがたくさん含まれていて、不思議に人を引き付ける力があります。午年の節目にこそ、馬のように堂々と駆け抜けたいものです。(馬・午・うまのことわざに興味のある方は事務局まで連絡を。詳しい資料を提供します)